

やはり俺が盾の勇者なのはまちがっている。

水源 + α

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

修学旅行の一件から、比企谷八幡と由比ヶ浜結衣、雪ノ下雪乃の関係はちぐはぐになっていった。彼の自己犠牲を厭わない言動に、周囲は無意識に傷付き、また憂いている事実を知らないまま、彼はある日生徒会選挙の件を解決するために、図書室に情報収集に来る。なにか利用できる情報はないかと探していると、床に一本が無造作に落ちていた。その本には『四聖武器書』と書かれていて、ふと手に取った彼はページを捲る内に盾の勇者のページに到達した時、何故か白紙と なっていたページが光り出し——次に目を開いたら、そこには見覚えもない三人の日本人と、多くの謎の集団が居て、一人の謎の男が言うのだ。「勇者さま、この世界をお救いください」と

目次

プロローグ そうして彼と彼女たちはすれ違う	1
召喚勇者たちと腐り目の男	13
三人の勇者とハズレ勇者。	23
仲間なんてなかった。	34
おっさんとハズレ勇者	44
初戦闘と共闘	57

プロローグ　そうして彼と彼女たちはすれ違う

——総武高校の修学旅行先である京都。俺は今、我が愛しの故郷である千葉から新幹線に乗ってここに来ていた。

行く前までは『修学旅行は社会生活の模倣みたいなものなんだよ』と由比ヶ浜や雪ノ下に自論を展開する程ではあったのだが、来てみればどうだろうか。いつの間にか自分なりにも、そして奉仕部のあいつらとも、言葉には出さないがこのイベントを密かに楽しんでいった。

しかし、楽しんでばかりではいられないのが、現状としてあった。それは、同時期に、同じクラスメイトである海老名さんと、戸部が葉山を連れてやってきた二人による奉仕部への依頼をされたからである。

海老名さんからの依頼——というのは違うかもしれない。言い換えるとするならば海老名さんからの願いとしては『葉山と三浦を中心としてつるんでいるグループの現状維持』というものであり一方、戸部たちからの依頼としては『この旅行中に海老名さんに告白したいから、その手助けをして欲しい』というものであった。

海老名さんの願いと戸部からの依頼。正直言って、二人が望む結末は双方に見事なまでの逆方向である。彼女としては、今までのグループの関係性のまま、いつも通りの平穏な日々を送っていたい。しかし、いつしか普段から戸部と接していて、自分へ密かに好意を向けられていたのを気付いた彼女は、色んな理由もあり、その戸部からの告白を断るつもりであった。だがそんなことをすれば、互いに気まずい関係になってしまい、これからは振った男友達へ負い目を感じながら、接して行かなければならない。

結果として、葉山たちのグループはそんな二人の微妙な関係に対して、負の連鎖の如く同じように負い目を感じてしまい、仮にグループが崩壊しなかったとしても、彼を振ってしまうことで、以前のようなグループの関係性には戻れないことを、彼女自身が一番危惧していた。

だから、同じグループの三浦にはこのことを相談せず、第三者であ

る俺たち奉仕部に相談（？）しにきた。

まあ、実際に言ってきたことはもの凄くアバウトであり、短絡的なものでもあった。

——今まで通り仲良くやりたいもん……

あの海老名さんが何気なく奉仕部へ来た時にこぼしたその言葉の真意に、雪ノ下と由比ヶ浜は気付いていない様子だった。実質、海老名さんからの願いは、奉仕部への依頼ではなく、その意図に気付けた者への……俺個人への依頼だったのだろう。

戸部の依頼は、そんな海老名さんの思いとは全くの逆のものだった。別に告白自体が悪いわけではない。しかし、現状維持を望んでいる彼女からすれば、戸部がこの修学旅行で起こそうとしてることに対して、余り良い印象は抱かないだろう。

確かに海老名さんは、同じグループに居る由比ヶ浜と三浦が目立ち過ぎていただけで霞んでしまっているが、かなり顔は整っている方だ。戸部の他にも同じクラスや他クラスにも密かに想いを募らせている奴は、居ると思う。それでいて話しやすく気さくなところもあり、人から好かれる要素が充分あると言える。

しかし恋愛というのは非常に残酷である。時として最大の薬にもなり、最大の毒にもなり得てしまう。まだ、友達同士の喧嘩別れであれば補填は効くだろうが——告白を振って、振られた人間の互いの関係はその後、果たして喧嘩別れのように補填は効くのだろうか。大抵の場合、答えは否である。海老名も戸部とは友達では居たいのだろう。またこのグループを守りたかったのだろう。だからこそ、そのことを分かっていたから、修学旅行前に行動したのだ。

こんな板挟みのような依頼。正直言って腹が痛くなりそうだ。だがどちらの依頼にしても、片方の依頼を反故するような真似は出来ない。しかし、この二つの依頼を同時に達成することは出来ない。この場合、双方が納得は出来なくとも上手く落とし所を見つけることが先決だ。

そんな二人の思いに悩んでいる今も——俺はとある男から、個人的な依頼をされていた。

「——つまり……お前は何も変えたくないってことだな」

俺は目の前の男に、最終確認としてそのように問いかけた。その質問に対して問い掛けられた男は、明らかに奥歯を噛み締めている。整った顔に似合わないようなことをしながら、悔しそうに、そして何処か俺への罪悪感も交えたような声色で。

「ああ……そうだ」

と、言った。

「……」

俺はその返答には何も返さずに、されども意思は受け止めて踵を返し、男に——いや、葉山 隼人に背を向けて、歩き出した。

今日、俺や由比ヶ浜は協力して、戸部と海老名さんを出来るだけ二人にさせようとしてきた。しかし、所々葉山がそれを邪魔するような言動があったため、その中途半端さに不審感を抱いていたが、こういうことだったか。

海老名さんは葉山にもこのことを相談していた。だから、戸部の恋を応援しつつ、所々俺たちの行動を妨害していた。今までのような中途半端な態度を取っていたのは、葉山としても海老名に言われなくとも、グループの現状維持をしたかった節があったからだろう。あの時、戸部と一緒に奉仕部へ依頼に来たときも、いくつか反応に不審な点があったからな。

「……君にだけは頼りたくなかったのにな」

背後から絞り出すように呟かれた葉山のその言葉に、俺も

——お互い様だよ。馬鹿野郎

と、心の中で返し、俺は京都の綺麗な紅葉の木々たちの風景を眺めながら、又こう決意したのだった。

——葉山が守ろうとしてることなんて、俺には分からない。分からないままでもいい。だから出来ることがある……と。

そして。告白の時。物陰から、由比ヶ浜と雪ノ下と一緒に、戸部と海老名さんが対面しているところを見守っていた。戸部は言葉を振り絞って、頑張ってその言葉を伝えようとしている。一方で海老名は、『……うん』と、いつものような飄々としつつ、何処か悲しげな相槌を打ち、目の前の戸部からの言葉を待っていた。

俺はそんな二人の様子を窺いながら、意を決して、二人の側に早足で向かった。

最善の策を取るために。

「……ずっと前から好きでした。付き合って下さい」

——それは、俺が海老名さんに告白することだった。

そう。最善の策とは至って単純なものだ。戸部が振られる前に、俺が告白して振られれば良い。そうすれば、海老名さんの『今まで通り仲良くしたい』という思いは達成され、戸部からの依頼は達成とは言えずとも失敗にはなっていない。問題の先延ばしではあるが、この場であれば、これが良い落とし所だろう。

海老名さんは予想通りに『今は誰とも付き合う気は無いの』という言葉返して、そのままその場を立ち去った。その後戸部に『それは無いわ……』と、文句を言われたが、結果として彼は傷付かずに、これからグループ間で海老名さんと変わらずに接し続けられるだろう。これでもう今日は寝るだけ。内心安堵しながら、そう思っていた。

しかし、俺は失敗したのかもしれない。

何故かと言えば。

——すまない……君はそういうやり方しか知らないんだと、分かっていたのに。すまない

「……謝るんじゃないよ」

葉山はそんな行動を取った俺へ謝り。

——あなたのやり方……嫌いだわ。上手く説明出来なくて、もどかしいのだけれど。あなたのそのやり方、とても嫌い

「……」

雪ノ下はいつものように真っ直ぐな瞳でそう言ってきた。しかし、何故かとても苦しそうに。

——人の気持ち……もって考えてよっ！ 何で色んなことが分かるのに、それが分からないの……！！

「――」

由比ヶ浜は、涙を流しながら、俺へ悲痛の叫びを訴えた。

それから、俺のこの一件で、修学旅行以降、葉山のグループの関係性は守れたものの、奉仕部の関係性は拗れてしまった。妹ともその因果で、軽い口論になってしまった。

——ああ、最悪だ。



修学旅行が終わり、一週間が経過した。

相変わらず小町とは喧嘩したまま碌に口も聞いていない。奉仕部の面々とも気まずい空気のまま、学校に行くのがこれまで以上に面倒臭くなっている。

ただ、あの後の葉山のグループの関係性は大丈夫そうだ。教室での戸部と海老名さんの間も変わりなさそうだったからな。

しかし、まあ……

「……」

「……」

「……」

修学旅行前までに響いていた、由比ヶ浜の明るい声と、それに反応する雪ノ下の静かで優しい声は、現在はパツタリと止んでいる。別にそれが気になるわけではないが、少々この静か過ぎる奉仕部の教室が、不思議に思えているだけだ。

これも普段から何も変わらない光景だ。

俺は依然として黙って本を読んでいるし、由比ヶ浜は携帯を弄っているし、雪ノ下も偶に紅茶を交えながら、黙々と本を読んでいる。

だからこそ、こんな状況を鑑みてふと思ってしまうのだ。

——この部活が存在している意味はなんだろうか。

かと言つて、奉仕部の定義を忘れたわけではない。ただ、俺たちがなぜわざわざこうして三人集まって、無為な時間を過ごしているのか。また、何でそのような時間を過ごし、今まで心地良いとさえ心の内で思ってしまったのか。

この場合は、ただの馴れ合いなのだろうか。ただ、こうして三人と一緒に居るだけで良いという、漠然とした理由で俺たちはここにいるのだろうか。

「……」

そう思い耽っている時だった。突然、コンコンと空き教室の扉がノックされた。

「邪魔するぞー。少し頼みたいことがあるんだが」

平塚先生が奉仕部にやって来たようだ。

「「……」」

「……ん？ 何かあったのかね」

妙な静寂が包み込んでいる奉仕部の雰囲気不思議に思った平塚

先生がそう聞いてきたので俺が応える。

「……いや、何も。それよりも何か用ですか」

「ああ……入ってきて良いぞ」

と、何やら誰かの引率でできたようだ。

平塚先生の声に応じて入ってきたのは、城廻先輩と……なんかケバケバしてる一年女子だった。

「ちよつと相談したいことがあって……」

「城廻先輩？」

雪ノ下にとつてもこの時期に城廻先輩がここに来ることは予想してなかったのか驚いた様子だ。

「あ、いろはちゃん！」

「結衣先輩！　こんにちは〜！」

そして、何やら由比ヶ浜とこのケバい一年生は知り合いのようだ。

「……」

「ふふっ」

「……っ」

……なんで初対面なのに笑いかけてくるんだよこいつ。ビツチか。

……

……

……

依頼者である城廻先輩と一色というあざとい後輩から話を聞いた限りでは、また厄介な依頼だった。

何でも、一色が同級生に勝手に生徒会長として担ぎ上げられたらしい。要は嫌がらせというか、軽いいじめに近いことをされている。だから、どうにかして一色とやらを会長候補から外して欲しいという依頼がしたいとのこと。

というか、中々に女子っていう生き物はえげつないことするよな。

下手したらドラマでよくある男社員の権力闘争よりも闇深いんじゃないの。

「私、結構悪目立ちっていうんですか？ サッカー部のマネージャーとかもやってたりするので、葉山先輩とかとも仲が良いイメージとかも付いちちゃってるみたいで〜」

しかも、この一色という一年生。こりや如何にも女子から嫌われてそうだな。見事な猫撫で声だ。

中学の時にも居たな。それもジャグラーばりに男子を手玉に取ってたやつが。

一色の言ったことに、雪ノ下が反応する。

「悪戯にしても随分と手が込んでますね。立候補には確か三十人以上の推薦が必要だったと思うんですが」

「そんなに!?! よく人集めたね〜……」

「無論、しでかした生徒にはこちらで指導する」

ということとは、一色は三十人以上の女子から嫌がらせて推薦したという単純計算が出来上がる。由比ヶ浜はそんな実態に驚き、平塚先生も呆れた様子でそう答えた。

そんな中、思いついた事を口にしてみる。

「……やりたくないなら選挙に落ちれば良い。というか、それしかないだろ」

「うーん。ただ、立候補者が一色さん一人だけだし……」

しかし、咄嗟の城廻先輩の言葉で、この案は封じられる。

「となれば、信任投票ですね」

「信任投票で落選って……超力ツコ悪いじゃないですか〜」

雪ノ下の出した案も、依頼者である一色により洩られる。

であれば、少々荒削りだが、このような策はどうだろうか。

「応援演説をやる奴は決まってるのか?」

「……? いえ」

一色にそう聞けば、まだ応援演説をする人は決まっていらないらしい。

第一関門突破。あとは――

「なら簡単で手っ取り早い」

「えつと、どういうこと?」

「……最悪、信任投票になっても確実に落選出来て、一色はノーダメー
ジで切り抜けられれば良いってことなんじゃねえの。要は一色が原
因で一色が落選したってみんなが分かかってりやいい」

「そんなこと出来るの?」

由比ヶ浜の期待が籠った目に、少し罪悪感が募る。

「——応援演説のせいで一色が不信任になるなら、誰も一色のことな
んて気にしないだろ」

いや、俺は何故この言葉に罪悪感を感じているんだ。

「「……」」

教室に、ひと時の静寂が包み込んだ。明らかに、俺が言った言葉が
原因なのだろう。だが、俺はこのやり方が一番手っ取り早く、簡単に、
最善だと思っている。

一方で、由比ヶ浜は呆然とした顔から、少し目を伏せて、憂いの色
を目に浮かばせながら

「……ねえ、その演説ってさ。誰がやるのかな」

そう返答してくる。

「……」

今までの俺であれば、そいつが誰なのか即答出来たはずだ。しか
し、何故だろう。答えられない。修学旅行の一件から、俺は何か変
わってきているのか。

「……そういうの、やだな」

「っ……それは、出来る奴がやれば良いんじゃないやねえーの」

だからこそ、中途半端な回答をしてしまう。

そんな俺に畳み掛けるように、そこで雪ノ下は口を開いた。

「そのやり方を認めるわけにはいかないわ」

「……理由は？」

「それは……っ、確実性が無いからよ。それに不信になるような演説は一色さんにも迷惑がかかるわ。仮に不信任になったとしても、再選挙なんて態々すると思う？ それから……。っ！ 生徒会への関心が低いんだから、票数を公開せず、結果だけ出したって誰も気にしないわ！ つまりその気になれば幾らでも——ッ！」

いつの間にか熱くなり、自分が言っていたことが不味いことだと思いい、そこで踏み止まったのだろう。そんな雪ノ下に、諭すようにその名を呼ぶ平塚先生。雪ノ下らしくない言動に、由比ヶ浜は瞠目させている。少し気まずい空気になったが、彼女は次に代替案を挙げる。

「……他の候補を両立して、選挙で勝つしか無いのでしようね」

「そんなやる気のある人間なら、もう立候補してないとおかしいだろ」
それにそう反論すると、雪ノ下は押し黙った。

結局、その後は何も決まらずにその日の奉仕部は終了した。

「……」

翌日、俺は意味もなく図書室に来ていた。いや、意味もなくではなく、例えば少し過去の生徒会に関わる資料とか、他にも有用な情報があれば得だと思っただけの来たのだが、それは希望的な観測であって、本当にあるとは言い難いので、そういう意味では意味もない行動になってしまう。

俺はあの後一晩通して考えてみた。何故あそこまで雪ノ下と由

比ヶ浜は俺のやり方を否定するのかを。しかし、考えても分からなかった。いや、分かるのが、分かっってしまうのが怖いというものあるのかもしれない。

「……生徒会の資料は」

資料室近くの本棚に行くときそれっぽい資料が置いてあった。勿論手に取って確認したが、どれもこれもその生徒会がどういう行動をしてきたのかという系譜が記されているだけだった。肝心の選挙にまつわる情報が欲しいのだが。

そう思つてまた歩き出すと、ふと少し高い棚から落ちて来たのか、少し年季の入った一つの本が開いた状態でポツンと床にあった。

「……図書委員、仕事しろよ」

中々選挙に関わる資料を見つけれない苛立ちを、このようなどころに本を放置する図書委員へ向けながら、俺はその本を拾い上げた。軽く手ではたいてから、その本のタイトルを確認する。

「……四聖武器書」

中々に厨二チックな名前だ。過去の俺が好きそうだな。いや、俺は決して厨二病だったわけではない。ただ少しプリキュアを見ながら、ああ、魔法が扱えたらなあと思つてたりしただけだ。

内容もちよろつと読んでみると、どうやら剣、槍、弓、盾の四つ武器を持った勇者が異世界から召喚されて、『波』と言われる厄災から国や人々を守るというものらしい。中々に面白そうだしなんだからノベみたいだ。

……しかしあれだな。この物語に出てくるある国の姫がビッチ過ぎる件。あざとさなんて、昨日奉仕部に来た一色の百億倍は酷い。この姫は意図的に策略を組んで、散々人を巻き込んだ挙句、肉親までも陥れてやがる。ここまでの清々しいビッチは他に居ないぞ。もう一周周つてそのビッチ具合が良いという輩が出てきそうなまであるビッチさだ。

亜人の国があるらしく、ここではどうやら盾の勇者が崇拜されているらしい。何故なんだろうか。ふむ……ああ、色々と助けてくれたからか。なるほど。別にそこまで気にするほどの理由でもなかったな。

そうして、剣、槍、弓の勇者のそれぞれの伝承を次々と読み進めていると、最後に盾の勇者のページが来る。

「……………」

しかし、不思議なことにその後のページは全て白紙だった。何故か盾の勇者の伝承だけ何も記されていない。どういいういじめなの、これ。盾だからなのか。というか今更思ったけど盾の勇者ってなんだよ。攻撃はどうすりゃええの。素手？ 拳なの？ 語り合っちゃうの？

そう考えると盾の勇者が一番勇者っぽくないな。

「…………ま、こんなところか」

そうして、その本を閉じようとした瞬間、辺りに。いや、正確には本から光が溢れ出した。

「——は？」

驚くこともなく、俺はただ呆然としながら、やがて意識を落とすのだった。

召喚勇者たちと腐り目の男

「……………おお」

突然、意識外から感嘆する声が聞こえて、そこで俺はハッと意識を取り戻した。

誰だとそちらに目を向ければ、三人のイケメンがそこに居た。俺と同じように状況が理解出来ない様子。

というか、ここどこだよ。

見渡してみれば、総武高の図書室だった辺りが様変わりしている。古びたレンガ調の壁と、蛍光塗料なのかは知らないが、僅かに光る何かしらの幾何学模様が描かれている地面があった。どこかの遺跡なのだろうか。数秒前までは本棚に囲われていたのに。

もしやドツキリで瞬間移動させられたのかって、いやドツキリで瞬間移動とかどういう芸当なんだよ。

てか何で俺はいつの間にか右手に変な鉄の塊持たされてんの？

よく見れば盾に見えるが、なんか凄えシンプルだ。ゲームの序盤で村長から貰いそうな感じの。真ん中にはそれはもう立派な緑色の宝石が埋め込まれている。宝石なのかは知らんが、売ったら金になりそう。

しかし。本当に訳が分からない状況だ。誰か説明してくんねえかな。

取り敢えず。目の前でコミケの会場入り前に居そうな、ご立派ロブを拵えた魔導師のコスプレしてるおっさんに状況説明を頼むとしよう。俺が一番近いしな。

「あの……………(こ)は？」

「おお……………！ 勇者様方、この世界をお救い下さい！」

「「おお！」」

と、口を開いてみれば、おっさんとその後ろに居る取り巻きが騒ぎ出す。

あとごめんなさい。俺帰りたんですけど。

どうやら勇者をモチーフにしたアトラクションに迷い込んだみた

いだ。地元が千葉だから、近くに東京ネズミランドあるし。多分そこに今居るのだろう。……きつとそうだと思います。

「え、えと……何言ってるんですか？」

率直な思いを言葉に込めると、おっさんが不自然な和やかさで返答する。

「色々と込み入った事情があります故、ご理解頂ける言い方ですと、勇者様達を古の儀式で召喚させていただきました」

「……召喚、ですか？」

どうやら、そういう設定で話を進めていくらしい。一応、話に合わせておこう。

「この世界は今、存亡の危機に立たされておるのです。勇者様方、どうかお力をお貸し下さい」

なんだろう。このおっさんと上手く話が出来ていないような気がする。要は一方的なラブレターみたいな感じで、おっさんから勇者様方へ一方的な求愛行動を取っているようだ。てか、俺勇者だったのかよ。そういう設定なのか。でもなんか嬉しい気持ちだ。何せ、俺が劇でやる役は大体悪役の咬ませ犬役か、酷い時は木だったからな。劇中は台詞もなく、ただ立っただけで、幕引きの時は観客席の保護者たちに向かつて『ありがとうございます』ってみんながみんな笑顔の中、俺だけ真顔で頭を下げていた。あの時ほどの虚無感を味わったことはない。

そう考えれば、俺が勇者とはこれまた随分と出世したものだ。

しかし、目の前のおっさんはさつきからお救い下さいの一点張りだ。もう少し詳細を話してくれないと何がどうなのか分からない。

そう思い立ち、俺がおっさんに詳しく教えて欲しいこと伝えようとする。

「……もう少し具体的に説明し——」

「嫌だな」

「そうですね」

「元の世界に帰れるんだな？ 話は先ずそこからだ」

その言葉を遮って、他に居たイケメン三人衆がそれぞれおっさん一

同の願いを拒否する。

いや、あのさ。いくらイケメンだからってそれはマジ無いわ。

……戸部るぞ？ 良いのか。

てかこの三人。よく見れば半笑いしてやがる。実は異世界に召喚されて嬉しかったりとかしてな。言葉の割には結構ノリノリだぞこのイケメントリオ。

「人の同意なしでいきなり呼んだ事に対する罪悪感をお前らは持つてんのか？」

その中でも如何にもラノベ主人公みたいな黒髪黒目のイケメンの剣を持った奴が、歳も離れていて、初対面であるおっさんに対して責めるように言い付ける。

俺より歳下だよなこいつ。

「仮に、世界が平和になったらっポイツと元の世界に戻されてはタダ働きですしね」

それに続き、少しウエーブがかかった女が好みそうな可愛い外見をしている、ボク優等生ですけど？ みたいな奴が生意気な口を開いた。俺、こういう奴苦手なんだよな。ここに来る前は女子からキヤーカー言われて、いえそんなことないですよ、と満更でもない態度してたんだろな。その弓の弦でお前のその縮毛を刈ってやろうか。

「こつちの意思をどれだけ汲み取ってくれるんだ？ 話に寄つちや俺達が世界の敵に回るかもしれないから覚悟して置けよ」

またまたそれに続いて、今度は如何にもウェイ系大学生ですつていう茶髪の奴が、ちよつと格好つけて持つてる槍に寄つ掛かりながら、そう言った。でも意外とこの中でこいつが言ってることはまともだ。他の高校生はアレとして。

自分達が今置かれてる現状と立場。それを理解しておかないと、あとあと後ろから矢を射られかねない。きつちりと保障してもらえないと。

というかここまで平然とスルーしてきたけど、お前ら普通に異世界に召喚されたことはサラッと信じてるんだな。因みに俺はまだドツキリという線を疑ってる。召喚なんてそんなのラノベみたいな話だ

し。それに、あとあと『残念、ドツキリでした』って言われたら悲しいからな。魔法とか見せてくれなくとも、この部屋から出て外の景色を見せて貰えばここが日本であるのか、日本ではないかはすぐ分かる。

「ま、まずは王様と謁見して頂きたい。報奨の相談はその場でお願いします」

ローブを着たおっさんは、そんな三人たちからの物言いに圧倒された様子で、俺たちを扉の方へ促す。

「……しようがないな」

「ですね」

「ま、どいつを相手にしても話はかわらねえけどな」

しっかし本当お前らイケメントリオは遅しいな。よくこんなローブを着た男たちの集団の目の前でそんな凶太い態度取れるな。こちら終始緊張しっぱなしだぞ。

それから、俺たちはあの暗い部屋から出て、石造りの階段を登っていった。

所々、石壁に開けられた鉄格子の窓から見えるその景色に、俺は思わず息を呑んだ。

そして確信する。嗚呼、俺は本当に異世界に来たのだと。

ビルも高い電波塔も、煙突も存在しない、どこまでも高い空に、中世ヨーロッパを連想させるような華やかな街並みが広がっている。何も現代的な要素が見受けられないこの美しい街を見下ろしているだけで、心が躍る。まるで、昔のヨーロッパの街にタイムスリップしているみたいだった。



「ほう、こやつ等が古に伝わる勇者達か」

そして、王の間で良いのだろうか。そこに案内されて、玉座に居座

る、如何にもな王様が、俺たちをじっくりと見定めながらそう言うてきた。

流石、王ということもあって、威厳のある声してる。

「ワシがこの国の王、オルトクレイメルロマルク三十二世だ。勇者たちよ、顔を上げい」

いやいや、俺を含め四人とも元々、堂々と顔上げてるんですけど。だからあなたがその玉座に座っているのも、あなたの容姿もこの目で見て認識出来るんですけど。この人……もしかしてボケてるのか。

「さて、まずは事情を説明せねばなるまい。この国、更にはこの世界は滅びへと向いつつある」

と、早速王様が語り出す。おい、早い早い。自己紹介。

「えと、あの……自己紹介とかは良いんですか？」

俺がそう進言すると、王様は「……ん？ ああ、そうだったな。では勇者たちよ。それぞれの名を聞こう」と、言い直す。いや、あの本当に大丈夫ですか？

「天木 練。年齢は十六才。高校生だ」

黒髪イケメンは如何にも主人公って感じの名前してんな。てか歳下かよ。それでよく王様相手にタメで話せるな。

「オレは北村 元康。二十一才。大学生だ」

茶髪のウエイ系はなんか戦国武将みたいな名前してるな。

「次は僕ですね。川澄 樹。十七才。高校生です」

うわ、お前同い年かよ。嫌だわ。だったらまだ黒髪イケメンのが良かったわ。

んと、次は俺だな。ここでしつかりとキメていこうか。

「……俺は——」

「うむ。レンにモトヤスにイツキか」

おいこら少し頭ボケ気味のジジイ。それ絶対態とだろ。

俺が非難の目を向けていると、王様は態とらしく、さも今気付いた風に振る舞う。

「……ん？ ああ、すまん。で、其方の名前は」

「……比企谷 八幡。十七才だ」

態々高校生つて答える必要ないよな。というかさつきから気になるのは——王もそうなのだが、ここの王の間にいる官僚たちや女官たちの俺へ向ける視線が妙だ。明らかに先ほどから俺だけ歓迎されていないような感じである。……何かあるのか？

「……さて。先ずは事情を説明せねばなるまい」

如何にもスルーされたしな。なんだよこのジジイ。マジで喧嘩売ってんのか。千葉の兄貴舐めんじゃねえぞ。

「現在、この国、引いてはこの世界に危機が迫っているのだ。終末の予言により、世界を破滅に導く幾重にも重なる『波』というものが今年に現れることが分かっている。教会にある龍刻の砂時計はこの波を予測し、一ヶ月前になれば知らせしてくれる。しかし、既に襲ってきた『波』が来るまで、ワシらはそれを蔑ろにしていた。結果、一度目の波で被害が出てしまった！……これ以上被害を増やすわけには行かない。だから、伝承にあった其方ら四聖勇者を呼び寄せたのだ」

これでも結構端折っているとろろはあるだろうが、大体は理解できた。要はその『波』から、俺たちが今持っている伝説の武器を使って、世界を守れば良いということだ。……無理。え、怖いんですけど。今すぐ帰りたいんですけど。俺まだ小町と仲直りしてないし、それに奉仕部のあいつらとも……気まづいままだし。

「話は分かった。で、召喚された俺たちにタダ働きしろと？」

「都合のいい話ですね」

「……そうだな、自分勝手としか言いようが無い。滅ぶのなら勝手に滅べばいい。俺達にとつてどうでもいい話だ」

先程の半笑いと言い、内心はすげえドキドキしてる癖に。こいつら結構素直じゃないんだな。面倒臭い性格してやがる。あ、俺が言うな？ ……良いんだよ。ほっとけ。

「もちろん、勇者様方には存分な報酬は与える予定です」

と、そこに割り込んで来た王様の臣下の一人の言葉に、内心ホツとする。良かった。俺たちの立場はどうやら保障されているらしい。

「他に援助金も用意できております。ぜひ、勇者様たちには世界を

守っていたきたたく、そのための場所を整える所存です」

おお。なんと補助までしてくれるらしい。本格的に勇者つて感じがしてきたぞ。

「俺達を飼いならせると思うなよ。敵にならない限り協力はしておいでやる」

「……そうだな」

「ですね」

やっぱり遅しすぎだろ、お前ら。臣下の方も内心こんな若者たちに高慢な態度取られてイラついてんじゃないの？ 表情には出さないだけで。まあ天木と……北村さんだっけ？ 一応年上らしいし。ただし弓持つてる川……かわ。川崎よ、お前だけは許さん。その下手な敬語はイラつくから今すぐやめろ。

心の中で

「では皆の者、己がステータスを確認し、自らを客観視して貰いたい」
はて。ステータスとは。え、こっつてまさかゲームだったの？ これはゲームであって遊びではなくて、死んだら終わりのデスゲームだったの？

「えっと、どのようにして見るのでしょうか？」

いや、んなこと言われても分からん。てかこの場にいる誰も分からん。同じ境遇な訳だし。

「何だお前ら、この世界に来て真っ先に気が付かなかったのか？」

はい、主人公乙。やっぱり剣持つてる時点で怪しいと思ってたんだよな。流石だわ。黒髪黒目の剣持ちは。俺も一応黒髪黒目だが、そんなの天木のと比べたらチリくらいなもんだ。

「なんとなく視界の端にアイコンが無いか？」

「……え？」

確かに、よく見てみればちっちゃい変なものが見える。

「それに意識を集中するようにしてみろ」

言われた通りにして見ると、変な音が鳴った後に目の前の視界にステータス欄が表示された。

え、マジでこれゲームなの？

|| || || || || || || || || ||

比企谷八幡

職業 盾の勇者 Lv1

装備 スモールシールド (伝説の武器)

異世界の服

スキル 無し

魔法 無し

|| || || || || || || || || ||

ざっと見た感じ、これだ。

レベルは1なんだな。てっきり99の強くてニューゲームでチレムかと思ったけど、どうやら違うようだ。

材木座。聞こえてるか。どうやら異世界は行ったとしても必ずしもチートとは限らないみたいだぞ。

「Lv1ですか……これは不安ですね」

「そうだな、これじゃあ戦えるかどうか分からねえな」

「そうだな」

皆も自分のステータスを確認しているみたいだ。

「……といふかなんだこれ。意味わからん」

「勇者殿の世界では存在しないので？ これはステータス魔法というこの世界の者なら誰でも使える物ですぞ」

「……そうなんすか」

自分の今の能力を数字に変換してくれるのか。現代日本より技術発達してるじゃねえか。魔法においては。

「それで、俺達はどうすれば良いんすかね」

臣下の人に話を聞いてみる。

「ふむ、勇者様方にはこれから冒険の旅に出て、自らを磨き、伝説の武器を強化していただきたいのです」

「……強化」

この盾、どうやら成長するらしい。そう思うと何故だろう。途端にこの盾が我が子のように思えて来た。大丈夫、お年玉は俺の親父からくすねてくるからな。

「はい。伝承によりますと召喚された勇者様が自らの所持する伝説の武器を育て、強くしていくそうです」

「伝承、伝承ね。その武器が武器として役に立つまで別の武器とか使えばいいんじゃないね?」

北村さんが槍をくるくる回しながらそう言った。危ないですからやめて下さい。

というか、旅か。良いなそれ。でも俺さっさと日本に帰りたいんだが。もう『波』とかそこら辺のサーファーに任せれば良いんじゃないですかね。ほら、だってあの人たち波と友達だし。知らんけど。

「……ということは、俺たち四人で旅するの?」

え、やだ。こんなイケメンたちと旅なんて俺の心がすり減るだけだ。てかどの人も違うベクトルで苦手なタイプだし。

「お待ち下さい勇者様方。あなたたちは他に仲間を募り冒険に出ることになりません」

「それは何故ですか?」

このいけ好かん敬語は川なんとかだな。しかし、それには同意だ。別に勇者が四人いるなら四人で組んだ方が良いだろ。

「はい。伝承によると、伝説の武器はそれぞれ反発する性質を持っておりまして、勇者様たちだけで行動すると成長を阻害すると記載されております」

「本当かどうかは分からないが、俺達と一緒に行動すると成長しないのか?」

「恐らくは」

なるほど。そういうのがあったか。というか今日の前に注意のウィンドウが出てきた。その注意は先程の臣下の人の言っていたことと同じようなことである。

……つくづくゲームだよなこれ。なんかもうこれが現実かどうかも分からなくなってきた。

「となると仲間を募集した方が良いのかな?」

「ワシが仲間を用意しておくでしょう。なにぶん、今日は日も傾いておる。勇者たちよ。今日はゆっくりと休み、明日旅立つのが良いであ

ろう。明日までに其方らの仲間に見合う逸材を集めておく」

「感謝する」

「ありがとうございます」

「サンキュ」

「……うす」

それぞれの言葉で感謝を示し、その日は王様が用意した来客部屋で俺達は休むこととなった。

三人の勇者とハズレ勇者。

豪華な来客室に案内された後、俺たちは目の前に出てくるヘルプ的なウインドウをそれぞれ見ていた。勇者とは言え、その与えられた力を有効活用出来なければ、凡人と同じである為だ。加えて、俺の他の三人の日本人は見るからに実戦経験は皆無だ。勿論俺も皆無であるため、序盤はこの伝説の盾が俺の生命線となる。使い方くらい覚えて置かなければ瞬殺だろう。

しかし、目の前のウインドウに記されていることは基本的なものばかりだ。伝説の武器はメンテナンスする必要は無いとか。

だが見ていく内に、これは覚えておかないと不味そうな奴を発見する。それは、『ウエポンブック』という伝説の武器が有している機能のことだ。

どうやら自分のレベルと武器に融合させる素材、倒したモンスターによって、『ウエポンブック』は埋まっていいくらしい。実際、目の前には謎のアイコンが視界の端から端まで所狭しと表示されている。これらが解放されていけば、それぞれのアイコンに能力に応じて、この盾を変化させるというわけだ。

……マジでこれゲームなのか？

「……ちよつと良いですか」

俺と同じようにウインドウと睨めっこしている三人を呼びかけると、こちらに顔を向けてくれた。

「これって、ゲームの中なんですかね」

「っていかゲームじゃね？ 俺は知ってるぞ、こんな感じのゲーム」

お、どうやらチャラ男が知っているらしい。

「それって何ですかね」

「いや、何ですかねって言われてもな……というか有名なオンラインゲームじゃないか。知らないのか？」

「いや、やるとしても携帯ゲームくらいしかしないんで……オンラインゲームには触ったこと一度も無いんですよ」

「携帯ゲーム？ お前の名前と、あと歳いくつだっけ」

俺の名前覚えて無いんですね。まあ良いですけど。

「……比企谷です。歳は十七才で、高校生です」

「あー……それなら、オンラインゲームは厳しいかもな。パソコンなんて、学生じゃちとキツイだろうし」

「……ええ、まあ」

なんだ。この人結構良い人じゃねえか。学生の懐事情をよく理解してる。

「まあ、そんなお前に教えてやる。良いか。このゲーム『エメラルドオンライン』っていうゲームなんだ。国内じゃすげえ有名タイトルなんだぞ」

「……へえ、そうなんすね」

有名タイトル、ね。普段から結構テレビとかは見てる筈なんだが。すごい有名なゲームだったら、CMもやってる筈で、それを見て名前くらいなら覚えてるんだけどな。全く聞き覚え無いし、見覚えもない。これはちよっとおかしくないか。まあ適当に相槌打っておくか。そう考えてると、黒髪イケメン天木くんが割り込んでくる。

「何だそのゲーム。聞いたことも無いぞ」

あれ？ あの見えるからにゲーム通の天木が聞いたことも無いのか。北村さんの言う通りに、有名なゲームであれば知ってると思ってるんだけど。

「お前本当にネットゲやったことあるのか？ 有名タイトルじゃねえか」

「俺が知ってるのはオーディンオンラインとかファンタジームーンオンラインとかだよ、有名じゃないか！」

あの、すみません。あーだこーだオンラインばかりで全く分かりません。

「なんだよそのゲーム。初耳だぞ」

「え？」

「は？」

……うん。もう訳わからない。ゲーム通の彼等でさえこの有り様なのに、俺みたいなオンラインゲーム初心者からしたら聞いてるだけ

でも何とかオンラインばかりで頭が痛くなってくる。

「皆さん何を言っているんですか、この世界はネットゲームではなく
コンシューマーゲームの世界ですよ」

お前は黙っとけ。如何にもな、『え？ あんたら馬鹿なんですか？』
みたいなムカつく顔しながら口開くんじゃねえ。あとその敬語イラ
つくからやめろ。

「違うだろう。VRMMOだろ？」

うーん、なんか天木がその台詞言うのと、黒い人が剣持ってる何かと
重なるんだよな。何でだろう。あれ、そういえば天木。お前この前、
デスゲームに居なかったか？

「はあ？ 仮にネットゲの世界に入ってもクリックかコントロー
ラーで操作するゲームだろ？」

今のところ、北村さんのパソコンとマウスで操作するオンライン
ゲームの形が、俺からしたら一番しっくり来るかもしれん。オンライ
ンゲームといったら、やっぱりパソコンって感じがするし。知らんけ
ど。

「クリック？ コントローラー？ お前ら、何そんな骨董品のゲーム
を言ってるんだ？ 今時ネットゲームと言ったらVRMMOだろ？」

「VRMMO？ バーチャルリアリティMMOか？ そんなSFの世
界にしかないゲームは科学が追いついてねえって、寝ぼけてるのか
？」

「はあ!？」

どうやらここは北村さんと天木の討論会になりそうだな。俺は外
で待つてるからさ。存分討論して下さい。

というか、やっぱりこの中じゃ、天木が一番手慣れている気がする。
VRに一番慣れ親しんで居るからなのかは知らないが、さっきのス
テータスの開き方が分からなかった時も、こいつが一早く気付いた
し。

「あの……皆さん、この世界はそれぞれなんて名前のゲームだと思っ
ているのですか？」

そこで、今度は優等生が話に割り込んでくる。だからお前はそこで

大人しくしとけ。今主人公とウエイ系大学生の討論会やってるから。

「ブレイブスターオンライン」

「エメラルドオンライン」

「……ドラゴンズクエスト」

この世界RPGっぽいしな。これしか無いだろ。いや、三人とも困惑した顔でこちらを見ないで——って、え？ 普通ドラゴンズクエストのゲーム内容を理解出来ていれば、俺の回答なんて的外れも良いところなのに、誰も不思議がらない。まさか本当に知らないのか？

「あ、ちなみに自分は、ディメンションウエーブというコンシューマーゲームの世界だと思ってます」

いや、誰も聞いてないから。あ、因みにじゃねえよ。引っ込んでけ川なんとか。

「まてまて、情報を整理しよう」

まあここは一番歳上の北村さんがまとめるのが自然だよな。

「錬、お前の言うVRMMOってのはそのまんまの意味で良いんだよな？」

「ああ」

「樹、それと、えっと……比企谷。お前も意味は分かるよな」

「SFのゲーム物にあった覚えがありますね」

「ええ。まあ」

というか北村さん。また俺の名前忘れそうになってなかったか？

あの、ちゃんと数分前に伝えましたよね。まさかあなたもあの王様と同じくボケかけなんですかね。あ、俺の影が薄いのか。やかましいわ。

「そうだな。俺も似たようなもんだ。じゃあ錬、お前の……その、ブレイブスターオンラインだっけ？ それはVRMMOなのか？」

「ああ、俺がやりこんでいたVRMMOはブレイブスターオンラインと言う。この世界はそのシステムに非常に酷似した世界だ」

天木からの話はこうだ。VRMMOは既に一般的に広まっているものであり、フルダイブ技術が発展して、コンシューマーゲームやPCゲームは当に過去の物になっているらしい。え？ 天木。お前ほ

んとに黒の剣士とかに見覚えはない？

しかし、同じ日本人であれば、互いの認識が間違っていることは有り得ない。ただ、もし俺たちが違う時間軸の日本から召喚されたとしたら、有り得る話にはなる。実際、俺の時代には無かったフルダイブ技術が発達した日本から天木が召喚されているわけだし。つまり、天木が一番電子技術発展している日本から来ていることになる。

「それが本当なら。鍊、お前のいる世界に俺達が言ったような古いオンラインゲームはあるか？」

だが天木は首を横に振る……ん？ そうだとしたら、違う時間軸の日本から召喚されたことにはならないよな。

「それでもゲームの歴史には詳しい方だと思っっているがお前達が言うようなゲームは聞いたことが無い。お前達の認識では有名なタイトルなんだろうか？」

北村と川なんとかが頷く。俺も咄嗟に頷く。危ねっ。

「じゃあ一般常識の問題だ。今の首相の名前は言えるよな」

「ああ」

みんな頷く。

「一斉に言うぞ」

ゴクリ……。

「安倍晋三」

「谷和原剛太郎」

「小高縁一」

「壺富士茂野」

「三」「……」

……いや、三人とも誰だよ。首相だぞ？ 安倍晋三さんしか居ないだろ？ あの妙に滑舌が悪くて有名のあの人だよ！

しかし、これでもうはつきりしたな。

「……どうやら——」

「——どうやら、僕達は別々の日本から来たようですね」

おい良い加減しろよかわ、川……このくそ川島が。マジでその良い

感じに盛った髪の毛を丸刈りにするぞ。ああ？

「そのようだ。間違っても同じ日本から来たとは思えない」

「という事は異世界の日本も存在する訳か」

「時代がバラバラの可能性もあったが、幾らなんでもここまで符合しないとなるとそうなるな」

いや、でもほんとにこれどうなってるんだ。別に同じ日本から召喚でも良かったんじゃないの。

しかし、今までの会話から察する、俺と同じようにこいつらもヲタク気質なんだよな。良かったわ、陽キャが居なくて。居たら居たで持ち前のコミュ力で俺たちを助けてくれそうだけど。

「……このパターンだと、みんな色々な理由で来てしまった気がするのだが」

「あんまり無駄話をするのは趣味じゃないが、情報の共有は必要か」
「……」

居るよなあ、クラスにこういう奴。無駄にクール気取りやがって。天木の場合、今まではそこが良いっていう股が緩い女子が周りに居たからそのスタンスで来れたんだろうけどな。イケメンだからってあまり頭に乗るんじゃないよ。その内、目の前で尻尾を振ってくる女子が見えないところで陰口を叩いてるのに気付いて、俺みたいに目が腐ることになりますよ。気を付けて下さいね……あ、俺だけか。

「俺は学校の下校途中に、巷を騒がす殺人事件に運悪く遭遇してな」
「……さいますか」

「ああ。一緒に居た幼馴染みを助け、犯人を取り押さえた所までは覚えてるのだが」

なるほど。それで脇腹押えながら語っておりますよと。大体、取り押さえたは良いが揉み合いになった結果、刺されたのだろう。

なんだこいつ。いや、ホントにマジで。あなたは何処の主人公やっただ方なんですか？ 幼馴染みとか居る時点でもう結婚ルートだったじゃん。はあ……なんで俺の隣の家に幼馴染みが居なかったんだ。あ、でも俺には可愛い妹小町が居るではないか。そのままギャルゲ主人公らしく妹である小町と結婚して、ハッピーエンドも中々の夢では

ないか。まあ、出来ないんですけどね。だって実妹だし。

「そんな感じで気が付いたらこの世界に居た」

「……そ、そうか。まあ、その。なんだ……幼馴染み助けられて良かったな」

「ああ」

すごい良い笑顔だ。まあ本人が良しとしてるのならそれで良いとしよう。

「じゃあ次は俺だな」

軽い感じで北村さんが自分を指差して話し出す。

「俺はさ、ガールフレンドが多いんだよね」

「……まあ、そうでしょうね」

近所にいる気の良いお兄さんって感じがするよな。

「それでちよーっと」

「二股三股でもして刺されたか？」

と、そこで天木が小ばかにするように尋ねる。

すると、北村さんは頷く。うん、こいつクズだったか。

「いやあ……女の子って怖いね」

「……」

まあヒロインに首切り落とされて船でゆったりと遊覧旅行エンドじゃなくて良かったな。俺としてはそのエンド期待してます。

そして次は……かわ、川。川原？ の番だ。

ん？ 突然胸に手を置いたぞ。なんだ、情に訴える気か？

「次は僕ですね。僕は塾帰りに横断歩道を渡っていた所……突然ダンブカーが全力でカーブを曲がってきまして、その後は……」

「……」

で、轢かれて死んだと。なんだその見事なまでの異世界転生ムーブ。テンプレート過ぎて驚きもしない。

というかさ。え、まさか死んでなくて召喚されたの、俺だけ？ マジで超気まずいじゃんか。どうすんだこれ。

「あー……北村さん。この世界に来た時のエピソードって絶対話さなきゃダメっすかね？」

「そりやあ皆話してるしな」

うわあ……嫌なんですけど。絶対俺浮くじゃん。元々イケメン集団の中では目つきの腐らせ方で浮いてるけどさ。

「……学校の放課後、図書室に用があつて資料を探していたら、四聖武器書つていう本を拾つて。その本を読んでたら気付いたらここに居たつていう感じだ」

「……………」

ま、でしょうね。その反応ですよね。みんなが死んでる中で俺だけそのまま召喚ですもんね。いつそのこと殺して下さい。

「でも……あの人……盾だし……」

「やっぱ……所もそう？」

「ああ……」

あ、三人で徒党組んでヒソヒソ話始めやがった。やっぱり召喚されてから妙に俺だけが歓迎されてない感じだな。……なんか怪しいよな。

「……じゃあみんなはもう、ある程度のことには知っている訳なのか？」

「ああ」

「やりこんでたぜ」

「それなりにですが」

はい。仲間外れと。俺はどの世界に行ってもボツチだったようです。これでラノベ作るか。

「あ、あの。これから、この世界で戦うために色々教えてくれないっすかね。俺の世界には似たようなゲームとか無かったから」

そんな俺を、天木は冷酷に見てくる。んだよ、初心者に寛容じゃないやゲームは廃れるんだぞ。知ってるのかこのプロゲーマー風情の主人公が。あと、なんか腫れ物扱いされてるような優しい目で見るとやめてもらつていいですかね。北村さん。そしてそこに……かわ、カワ……川越？

「よし、元康お兄さんがある程度、常識の範囲で教えてあげよう」

何かうそ臭い顔で元康が俺に片手を上げて話しかけてくる。

「まずな、俺の知るエメラルドオンラインでの話なのだが、シールドー

……盾がメインの職業な」

「はい」

「最初の方は防御力が高くて良いのだけど、後半に行くに従って受けるダメージが馬鹿にならなくなってるな」

「……」

「高Lvは全然居ない負け組の職業だ」

「……はは、そうなんすね。まあ、俺にお似合いじゃないですか」

「そ、そうか？」

聞きましたか皆さん。どうやら俺はこの世界に来た時点で負け組だったらしい。誰だよこんなクソゲー作ったやつ。製作者出てこいよ。

「因みに、アップデートとかは」

職業バランスとかその他諸々だったら流石にあるだろ。

「いやあシステムのにも人口的にも絶望職で、放置されてた。しかも廃止決定してたかなあ……」

……だ、だったらあれだ。なんとか神殿に行けば転職できたじゃないか。

「……転職は」

「その系列が死んでるといかなんていうか」

「……じゃあ盾士じゃなくて、聖騎士になるみたいなのさという奴は」

「別の系統職になれるネットゲじゃなかったなあ」

もう俺足手まとい確定じゃねえか。帰りたいんだが。本格的に。

「……お前らの方は？」

天木と川越に目を向ける。

すると二人ともサツと目を逸らしやがった。

「悪い……」

「同じく……」

どうやら救いの手は無いらしい。もしもこの話が本当であれば、映画でよく見る序盤に笑顔で死んでいく老兵みたいなポジションだ。まあその時が来たら、膝に矢を受けてしまっただけ……って言ってみるのも手だ。いやそんなことしても意味ねえよな。

そんなこんなで、呆然とする俺には触れずに他の三人はゲーム話に精を出す。

「地形とかどうよ」

「名前こそ違うが殆ど変わらない。これなら効率の良い魔物の分布も同じである可能性が高いな」

「武器ごとの狩場が多少異なるので同じ場所には行かないようにしましょう」

「そうだな、効率とかあるだろうし」

さつきから何言ってるんだよ。同じ日本人だろうが。でも、考えてみれば、こいつらに頼ればいいんじゃないか。幸い、この世界に酷似しているゲームをやっていた奴が三人居るため、情報には困らずに、且つ一人だけに判断を仰ぐような状況には陥り入りにくい。その中で、何も知らない俺が客観的なことを述べていけば、案外ともに旅が出来るかもしれない。

「……」

話の花を咲かせている三人の近くにいるのも忍びないので、俺は一人窓際に向かった。

心地良い夜風が頬を撫でる。その窓からは、とても綺麗な夜景の街並みを眺められた。あの三人と話しているより、こっちの夜景を見ていた方が俺的には性に合っているような気がした。

「……盾の勇者、か」

三人が言うにはハズレらしいが、何せこれでも勇者なのだ。何か盾の勇者にでしか出来ないことはあるはずだ。適材適所という言葉もある通り、盾は人を守ることが出来る。俺が先頭に立って敵の猛攻を防ぎ、耐えているだけでも、役目を果たしていると言えるだろう。

俺はどちらかと言うと弓の方が合ってる気がするけどな。ほら、みんなが戦っている間、安全圏からペチペチ打つことが出来るし。

——何にせよ、第一は生き残ることだ。

「……それに」

俺はまだ、あの世界には未練がある。小町のこと。材木座のこと。戸塚のこと。川崎のこと。平塚先生のこと。葉山のグループ達だっ

てそうだし……何より、雪ノ下と由比ヶ浜のことだ。俺が居なくなり、奉仕部自体が無くならないか心配だ。いや、なんで俺が居なくなると奉仕部が無くなってしまうという考えに行き着くんだ。

……分からない。だけど、だからこそ。俺はあの世界に帰らなければならぬ。答えを見つけるために。

本物を、見つけるために。

「……悪いな。そっちは任せただぞ」

雪ノ下。由比ヶ浜のことを導いてやってくれ。

——その後夕食の準備が出来たと給仕が訪ねてきたので、俺たちはそのまま夕食を食べた。

小町の料理食べてえなあ……

仲間なんてなかった。

「……知らない天井だ」

翌朝、俺は目が覚めると、そんなことを呟いていた。いや、意図的に呟いたのだ。だって言ってみたかったんだもん。

……でもなんだか恥ずかしいし虚しくなるなこれ。これからはやめとこ。

ということだ。もちろん、この部屋には俺以外誰も居ない。勇者ということもあって、一人一人に来客用の部屋を貸し出してくれたのだ。俺はその内の一つ部屋のベッドで今、身を起こしたばかりなのだ。が――

「……やっぱり埃臭えんだよなあ。ここ」

起きてから早々言うべきことでないかもしれないが、でも俺は言おう。埃臭えよこの部屋！

……おい。確かに見た目は、天木や川なんとかや北村さんとみたいな勇者には程遠い盗賊Aみたいだけどき。それにしたって、こんな掃除も暫くされてないような部屋に勇者である俺を泊まらすというのはおかしいだろうが。

確かに俺は覚えている。昨夜、この部屋へ、若干二十歳くらいの綺麗な侍女さんが、顔を引き攣らせながら渋々案内してくれた時の記憶が、それはそれは今でも心に悪い意味で深く刻まれている。

しかも初対面なはずなのにだ。流石に地球にいた頃に初対面であれほどあからさまに嫌がられるのも初めての経験だぞ。

「……あれ、もしかして俺という存在自体が害悪なの？」

いや、俺何もしてなくね？ てか今のところ何もさせて貰えてもないし。もしかして、無意識の内に侍女さんたちへ目でセクハラでもしてたからとか？ いやしてるわけねえだろ。逆だよ逆。俺は男ですらあまり目線を合わせられないんだぞ？ 確か城に仕えている侍女や執事たちは全員が貴族の子女だったっけか。育ちが良いのか殆どが美男美女でしたよ。尚更、顔なんて見れねえよマジで。

まあ……王様とか大臣たちとかはアレだけど。

「……というか、もしほんとに『目がいやらしかったので』みたいな理由でこんな埃臭い部屋に案内されたんだったら理不尽過ぎないですかね。てか公私混同してるし。」

「ああ。俺が将来社会人になったとき、勤務先で、『比企谷先輩に目でセクハラされました』って人事部に理不尽過ぎる報告が行ったりして解雇されたらどうしよう。お兄さん絶句して言い返そうにも出来ねえよ多分。」

「さて、ここまででは半分冗談だとして。……いや、半分本気で落ち込んでますけども。」

「……流石におかしすぎるよな」

「——そう。おかしいのだ。先程挙げた、『侍女さんとは初対面な筈なのにいきなり嫌われてた』例も、少し考えてみれば不可解なのだ。先ずこの世界は当然、異世界という訳だが。逆に考えれば、この現地人たちには、俺が前の世界でどのような言動をしていた人物なのかすら知っている人なんていないはずだ。だというのに、ではなぜ、俺に会う前から王やその他大臣などを含めた城の人間たちが、俺へ明らかに敵視しているような視線をぶつけてくるのかという話になる。」

「……一つ考えるところなら、異世界人をここの人間たちが嫌っている可能性だけだ」

「多分これはないだろう。そしたら何故、天木たちイケメン三人衆が明らかに羨望され、俺が蔑まれた視線たちを浴びなければならないのか、という理由に対して納得がいかない。」

「他に何か理由があるのか。もしか、唯一四つの武器の中で攻撃できないこの『盾』が原因か。」

「……それこそ有り得ない。盾だからって嫌われてたら、キリがねえわ、完全な風評被害だわで色々忙し過ぎる理由だ」

「でももしそんな理由だったとしたら、俺この先どう生きていけばいいんだよ。」

「——おはようございます、盾の勇者様。朝食の準備が出来ました。盾の勇者様以外の方は既に席に着かれております」

「と、そこに一応ノックしてから挨拶しに来てくれる人がいた。昨日

ここへ案内してくれた綺麗な侍女さんだ。名前は知らないが、よく見てみればこの人は黒髪で、なんだか親近感が湧く。城にいる人間の殆どは茶髪や金髪など、如何にも異世界みたいな髪色しか居なかったの
で、見ていて落ち着かなかったのが理由だ。

ま、俺はこの目の前の人から明らかに嫌がらせを受けたけどな。埃臭え部屋に案内しやがって。つたく、しゃあねえ……ここは盾の勇者様として、ガツンと言ってやろう。

「……あ、あの。ここ埃臭いんですけど。ちゃんと掃除はしてるんですか？」

「……身支度が済んだら呼んでください。では、失礼致します」

おい、てめえ。

「あの！ 聞こえてますか？ 埃臭かったんですけどちゃんと——」

「——時間がありませんから、出来れば急いで下さると幸いです」
「……」

はい出た。女の常套手段の言葉被せ& a m p ;スルー。しかも表情一つ変えずにね。まさか朝から美人にイラつくことになるとは思わなかったわ。異世界なんて今のところ疑念とイライラだけで構成されてるんですけどね。あー『波』だかどうだか知らんけど、やっぱりそこら辺のサーファーに任せようかな。俺、関係ないし。

「はあ……じゃあ分かったんで、さっさと出て行って下さい。あなたのご希望通りに急ぎますので」

寝起きの機嫌の悪さと、先程の侍女の反応から苛立ちを覚えてしまったのが相まって、自然と口からそんな言葉が出てしまう。

「……っ！ ……承知いたしました。失礼します」

流石に今のはあの鉄仮面女も、反応せざるを得ないだろう。明らかに今、俺の不遜な態度に対して眉をピクツと動かしてたな。意外と沸点低いのは把握した。

そうして、怒気を待たせながらやや早足で退室する彼女の背中に、気を良くして小さくバイバイと手を振って煽ってたら、扉が閉まるときにひと睨みされたことで俺は恐怖でフリーズした。

「……女って怖いわ。やっぱ」

そんなことを思いながら、俺も身支度をして、朝食を食べに向かったのだった。



朝食の後、俺は取り敢えず昨日の夜に話し合った部屋で、天木たちと一緒に静かに待機していた。昨日の謁見時に、確か王様は『俺たちの旅に同行したいという仲間を募ろう』とか言っていたので、多分今日予定されている謁見はその件のことだろう。しかし、流石に朝食を食べて直ぐに王の間へ行く訳にも行かず、こうして天木たち三人が俺が知らないゲームの話をし合っている中、俺は一人外を眺めて待っていると、ついに呼ばれた。イケメン三人衆は、王の間に向かっている道中で如何にも浮ついている感じで、どんな仲間たちが旅に同行するのだろうと期待しているのだろうと様子でわかった。しかし、俺は一抹の不安を抱いているのだ。

それは今朝の出来事にも関係していることなのだが、果たしてあの侍女さんみたく、初対面から何らかの原因で会ってもない俺に悪い印象を抱かれてしまったら、俺に同行してくれる仲間なんて居ないに決まってる。あの侍女さんからさえあの嫌われようだ。この国の人間はどうにも信用出来ない。

「勇者様のご来場」

謁見の間の扉が開くと其処には様々な冒険者風の服装をした男女が十二人ほど集まっていた。

騎士風の身なりの者もいる。

……こうしてみると壮観だ。

俺達は王様に一礼し、話を聞く。

「前日の件で勇者の同行者として共に進もうという者を募った。どうやらここにいる皆の者も、同行したい勇者が居るようじゃ」

「……………」

やっぱり、俺だけ周りの視線たちの温度が違う。明らかに他の三人との温度差があるのだ。人一倍に他人の視線に敏感で、且つ空気を読むことに長けていることは自負しているが、だからこそ今のこの状況がキツイ。

王様の側に控えている臣下、そして女官や侍女、兵士たちに加えて、貴族たちだろうか。この謁見を見るために来た聴衆たちの多くの視線たちが、俺をどこか生温かい視線で見ってくる。

蔑んでいる者から、中には少ないが憐れむ者まで多岐に渡った。なるほど。もう俺は理解できた。この状況ではつきりわかった。

多分俺に同行してくれる仲間なんていない。何故なら、先程の王様の発言で全てが分かる。王様は確かに同行者を募った。しかし、それは結局募ったもので、決して強制ではない。ここに居る人たちは全員が有志で来たのだろう。しかも、王様はこの人たちは既に同行したい勇者を決めているような言い草だった。

……であれば、俺の仮定が間違っていないとするのならば、絶対に俺の元には誰も来ない。

「さあ、未来の英雄達よ。仕えたい勇者と共に旅立つのだ」

もうこの人たちが同行したい勇者を選ぶという時点で、俺に最初から味方なんて居なかつたのだ。

それぞれが動き出す。そして案の定――

「…………おおお」

聴衆たちがざわつく。

三人の勇者の後ろには確りと、予定されていたように、それぞれに仲間がいた。

「…………数が多いと少し鬱陶しいのだが」

天木の元には五人。

「マジかよ。俺ってばやっぱり異世界でも女子に恵まれるんだなあ」

北村さんの元には四人。

「この人たちが…………僕の仲間たちですか」

川なんとかの元には三人。

——そして、

「……」

案の定。俺の後ろには誰一人として居なかった。

元々居たのは十二人。小学生でも3×4＝12という掛け算で、一人の勇者につき、三人が同行者として付いていくのが妥当と答えるよ。うなこの状況下で——分かりやすく俺は避けられているのだ。

「……やっぱり、一人。か」

小さく溢してしまったその言葉は、誰の耳にも届かない。

ま、確かに一人には慣れてるが、流石に盾だけでは心許ない。防衛面は最強だとして、矛はどうすればいいんだよ。殴るのか？ 冗談じゃねえ、俺が疲れるだろうが。

そんななんともコメントし難いこの状況に、王様は気まずそうに口を開く。

「……う、うぬ。さすがにワシもこのような事態が起こるとは思いもせんかった」

「はっ……人望がありませんな」

そして、事もあろうに呆れ顔で大臣が切り捨ててくる。あの野郎、顔は覚えたからな。いつか坊主頭にしてやるから覚悟しとけや。

そこへローブを着た男が王様にこそこそと耳打ちした。

「ふむ、そんな噂が広まっておるのか……」

「何かあったのですか？」

北村さんが微妙な顔をして尋ねる。

さすがにこれでは不公平も甚だしい。何だよこの、小学校でチームを作って遊ぶ時に一人だけ仲間はずれにされたような感じ。懐かしいなあ。ノストラジックな気分になったわ。

「ふむ、実はの……勇者殿の中で盾の勇者はこの世界の理に疎いという噂が城内で囁かれているのだそうだ」

「……なるほど」

「それとだな。伝承で、勇者とはこの世界の理を理解していると記されている。その条件を、満たしていない可能性があるのではないかと

もな」

そこで、北村さんが肘で小突いてくる。

「……もしかしたら、昨日の夜に話した時の内容が盗み聞きされてたかもだぞ」

「……でしようね」

「おいおい。でしようねって、比企谷……これはお前のことだぞ」

あ、やつと名前覚えてくれたんですね。

「ええ、まあ……良いじゃないすかね。俺に人望がなかったってだけの話なんで」

ため息を吐きながら言ったのは、自分で言うのも憚れる言葉だからだ。自分自身に人望がないって自分から他人に話すのって意外とダメージデカいんだからね！

「大丈夫かよ……はあ。ったく。おい、練！ お前五人いるんだから一人くらいは比企谷に分けてやれよ」

そんな俺を見かねたのか、北村さんが天木に人員を分けようと提案してくれた。

一方、提案を聞いた天木の後ろにいる人たちは怯えるように後ろに隠れる。結果的に怯える同行者たちの盾にされた当の本人である天木も、困ったように頭を掻きながら

「俺はつるむのが嫌いなんだ。付いてこれない奴は置いていくぞ」

そう言って、同行者たちを突き放すが、それでも面々は必死に首を振って俺の元に来ようとはしなかった。

そんなに嫌なのか……流石の俺もちよつと傷付いた。心のライフはゼロだ。あ、死んだ。

「……もう良いですよ北村さん。俺は一人で」

「でもなあ。お前、盾職なのに誰が攻撃を担うんだよ」

「殴れば良いんですよ。蹴りもあるんで、それでなんとかします。まあ、どうせなら北村さんの同行者たちにも言ってお聞かせて下さいよ」
そう言った瞬間、天木の同行者たちと同じように、北村さんの女どもも明らかに俺から距離を取ってきた。

異世界の女ってクソだったんだな。材木座、どうやら期待しない方

がいいぞ。絶対異世界に来ない方が良い。俺はともかく、お前はこの状況に耐えきれないだろうからな。

「え、ええ……いや、でも本人たちの意思もあるし」

そして言い出しつぺである北村さ——いや、北村本人も渋ってくる始末だ。しかも言ってる言葉も建前というね。どうせお前の同行者四人とも女だから、ハーレム作りだけな癖に。顔からも丸分りだ。あーどうしょ。さん付けとか馬鹿らしくなってきたわ。こんなヤリチンな先輩なんて御免だわ。

「……ま、そう言うことです。この場にいる誰一人として俺の元に来ないのは分かったんで、王様。さっさと進めて下さい」

「……む」

「……っ」

今の状況に、なんだか面白がって見ているような気がしたので、あえて一部を強調しながら放った俺の言葉に、王様や大臣は気圧されながらも、俺に言われた通りに話を続けることにしたようだ。

「で、では次に——」

「——あ、勇者様。私は盾の勇者様の元に行っても良いですよ」

と、そこで北村のハーレムパーティーから、挙手をしてそんなことを言った女が居た。

セミロングの赤毛の可愛らしい女の子だ。

顔は結構整っている。やや幼い顔立ちだが、身長は俺より少し低いくらいだ。

「……良いのか？」

俺は一応勇者の立場だし、ここは敬語よりもこっちの話しの方が良いだろう。

「はい」

そう聞けば、笑顔で返してくれた。

「他に……えーっと」

「ハチマン殿です。陛下」

「あ、ああ……ハチマン殿に付いて行きたいと思う者はおるか？」

だからいい加減俺の名前を覚えろ。ボケかけてんじやねえか。

王様がそう声を張り上げてても、静寂が答えだった。見事なほどに、この状況で俺に付いていきたいという物好きな美女以外は、だーれも手を挙げなかった。……何度体験してもこの時間が一番辛い。

「仕様があるまい。ハチマン殿はこれから自身で気に入った仲間をスカウトして人員を補充せよ。月々の援助金を配布するが代価として他の勇者よりも今回の援助金を増やすとしよう」

「……はい」

そんな嘆くように言わなくても良いだろうが。こっちだって恥ずかしい思いしてんだよボケが！

ま、援助金が増えるのは嬉しい。どうやらまだ妥当な判断をする脳はあるみたいだ。

「それでは支度金である。勇者達よ、しっかりと受け取るのだ」

そうして、俺達の前に四つの金袋が配られる。

ジャラジャラと重そうな音が聞こえた。

その中で少しだけ大きい目の金袋が俺に渡される。

「ハチマン殿には銀貨800枚、他の勇者殿には600枚用意した。これで装備を整え、旅立つが良い」

「……は！……」

俺達と三人の仲間たちはそれぞれ敬礼し、謁見を終えた。王の間をぞろぞろと仲間を引き連れて後にして、廊下を歩いて行く三人のイケメンの背中たちを見送りながら、こちらはこちらで自己紹介を始める。

「えっと……盾の勇者様、私の名前はマインIIスフィアと申します。これからよろしくねっ」

「……よ、よろしく」

何の遠慮もなく、スツと俺の懐へ入り込もうとするマインに気圧されながら、辛うじてそう返答する。多分、空元気だろうな。

王の間ではあんな事が起きてしまったのか、少し気後れしてる様子だし。まあ、彼女に取ってしてみれば、気ままずいだろうな。だって俺、

明らかにあの場でアウェイでしたし。多分このマインって娘も憐れみで俺と組んでくれたのだろう。

まあ、あのまま気まずい雰囲気晒されてた俺を助けてもらったのは事実で、仲間になってくれたのもまた事実。

ここは素直にお礼を言わなきゃいけない。

「……マインさん。さっきは、その。ありがとう」
「え？」

挙動不審になった俺からいきなり礼を言われて、驚いた様子だ。

「いや、あの………じゃあ行くか」

「……は、はい？」

うん。無理。

恥ずかしいです。顔も熱いです。誰か助けてください。

——こうして、俺の冒険の物語は始まるのであった

……もうエピソードいいっすか？

おっさんとハズレ勇者

——マインさんと一緒に城から出て来た俺は、まずは装備を整えようと武具店を目指していた。

あの覚束無さ過ぎる自己紹介した後、これからの行き先を考えながら城の廊下を歩いているときに彼女から「では私が知ってる良い店があるので案内しますよ！」と言われたからだった。

正直、マインさんからおススメな武具店を紹介されるとは思わなかった。

その理由は第一印象として、あまり戦闘とかには慣れてなさそうな感じだったからだ。身なりからして冒険者らしいが、身体の造りがそうには見えなかった。むしろ良いとこ出のお嬢様と言われた方が納得できる容姿をしている。

あくまで自論だが、例えば冒険者はその職業柄、色んなところに出向いて行くと仮定するとしよう。その場合、いくら女性とはいえ冒険者なので、美容とかに普段から余り気を遣えないと思う。そう考えると、マインさんは冒険者にしては、肌が物凄く綺麗だし、髪の毛のセットだって、どちらかといえば洒落ている。

そう。冒険者にしては美容に気を遣い過ぎていると思ったのである。それに、機能性を考えればもう少しシンプルな髪型にもできた筈だ。

武具店はあともう少しで着くらしいが、このまま会話が無いのもアレだし、少し聞いておくか。

「あの、マインさん」

マインさんは俺を先導するように少し前を歩いていたが、俺の呼んだ声に立ち止まってくれた。

「はい、なんですか？」

「……いや、少し気になったことが、その。あつて」

「……？ 質問ですか？ 構いませんけど」

「じゃあ質問なんだが、マインさんは俺に付いてくる前、冒険者だった……という位置付けで合ってるのか？」

そう聞かれた彼女は少し考える素振りを見せて、小さく頷く。

「はい。今日、盾の勇者様と同行する前まではきちんと冒険者として活動してましたよ」

「はー……凄いですね。どんなことをやってたんすか？」

「まあ、魔物を倒したりとか。あとは素材を集めに行ったりとかしてましたよ」

「……」

……なんだか怪しいな。

遠回しに冒険者はどんなことしてるのか？ と聞いたのに、冒険者本人から中々にアバウトな内容で返答してきたことに、少々疑念が募る。

本音を言うと、俺はまだマインさんを信用はしていない。逆にあの状況で一人、俺に同行したいと言ってきたタイミングに、何かの違和感を覚えたのだ。

王様は確かに十二人居た逸材と言われる人たちへ、『同行したい勇者』を選べと言った。そして、その十二人達はさも既に付いていく勇者を決めているという口ぶりでもあったし、それは事実だった。それで、マインさんは先ず北村を選んだ。この時点で既におかしいのだ。大半の人たちが事前について行く勇者を決めていたのであれば、何故マインさんだけ最初に北村を選び、また最終的に誰も来たがらない俺の元へ来たのだろうかという素朴な疑問がある。

それに、俺はあの時「一人でも良い」と突っぱねた。本人が良いと言ってるのに、何故注目がより一層注がれるようなあのタイミングで拳手をしたのか。

確かにあのタイミングで拳手をして、俺について来てくれると進言してくれた行動には感謝している。しかしどうにも示し合わせたかのようなタイミングだったと言えば辻褃が合ってしまう。なんだか都合が良いとさえ思えてくるし、俺を安易に信用させたいがために、あのタイミングで進言したのかも定かではない。もしそれを狙ってやってきたとすれば、マインさんは相当なやり手だ。

……まあ考え過ぎだろうが、この国の人たちはきな臭いからな。用

心に越したことはない。

「——あ、着きましたよ。ここが私のおススメな武具店ですよ！」
「……………ここか」

と、考えてるうちに着いたみたいだ。店の外観もそれっぽく、結構年季が経ってそうな佇まいだ。

どうやら本当におススメしたい店のようだが……これが明らかに新店舗だったら相当な疑念を彼女に向けていた。もし新店舗をおススメされたら、俺を嵌めるために帳尻合わせで作った店なのではないかと疑っていたところだ。

「おお……」

店の中に入ると、剣や槍、甲冑まで色んな武器や防具が勢揃いしていた。初めて本物の剣などを見て、何処か緊張してくる。いや、少しの怖さもあるのかもしれない。だがそれと同時に興奮してきているのは内緒だ。カッコいい。

「勇者様。こつちー」

「あ、ああ」

マインさんに呼ばれた方にカウンターがあった。歩いて行くと、ここには筋骨隆々のスキンヘッドで、尚且つ髭面な強面店主さんが立っている。まだ作業服をみたいなのを着てるので辛うじて職人だというのは分かる。

でもマフィアにでも黒服姿で居そうな見た目なんだよな……

店を見るからに素晴らしい武具店のだが、店主が海外のマフィアに居そう怖い。これがこの店のマイナスポイントだろう。小町もついポイント低いつて言いそうな勢いだ。

「いらっしやい」

「あ、ああ。えと、こんにちは」

意外にも武骨そうだった店主から元氣良く挨拶されて、少し動揺しながらも俺も挨拶する。にしてもダンディな声してるな。

「お、もしかしたらお客さん初めてだね。当店に入るたあ目の付け所が違うね」

「いえ……それは彼女に紹介されたからで」

そう言って遠慮がちに俺はマインさんを指差すと、彼女も軽く手を振って応じてくれる。

「ありがとうよお嬢ちゃん」

「いえいえこの辺りじゃ親父さんの店って有名だし」

「嬉しいこと言ってくれるねえ。……所で、その変わった服装の彼氏は何者だい？」

そういえば俺の服装って総武高の制服のままだったな。こっちの世界の住人からすれば、見たこともない材質で作られた奇怪な服装を着ているから困惑するだろうな。

それに、ここに来てから一度も日本人みたいなのというか、東洋系の顔つきをしてる人が居なかった。あの城の中でも、ここまでの道中でも、道ゆく人皆が地球で言うヨーロッパ系だとかラテン系の西洋人みたく彫りが深い顔つきをしていた。

俺を含めた勇者たちは全員ここじゃ珍しい東洋系の顔つきだから服装も相まって、尚更不思議がられても無理はない。

さらに付け加えておくと、天木たちはイケメンだから良いのだが、俺は目が腐っている。注目を相当な浴びることだろう。

……あれ、今思っただけど俺って側から見たらマジで怪しくない？

「この不思議な服装を着てる男の人が、突然何も持たずに武器屋にやってきたのは……ここまで言えば、親父さんも分かるでしょ？」

「っ！……となるとアンタは勇者様か！へえ！」

と、まじまじとおっさんに顔を凝視される。いやん、そんなに見ないで。

「……あんまり頼りになりそうに無いな」

おい（らしく）〇じじい。この目で貴様の目も腐らせても良いんだぞ？

「……はつきり言うんすね」

「良いものを装備しなきゃ舐められるぜ」

遠回しにこの店の良いものを買えと言ってるのか。まあ買いますけどね。

「……分かってますよ」

しかしここはアメリカみたいだな。裏表は余り感じないけどズバツとストリートに言ってくる奴が多い。例えば今日の前で失礼なこと言ってきたおっさんとか……あと目の前のおっさんとか？

「見たところ……はずれ？」

な？ 言ってくんだよこうやって。裏表なさ過ぎだろ自重しろ。

でもはずれて言われたことはつまり、既に出発前の出来事の噂が街にも流れてしまっているということか。

え、早っ。女子間のネットワークみたいな噂の伝達速度じゃねえか。

ほら女子たちつてすぐに隣のクラスに『ねえ、比企谷が折本さんに告ってフラれたらしいよ』って触れ回るじゃないですか。ソースは俺と同性の友達な。……俺じゃないもん。

だが一つ確かなことは、何かと俺に都合が悪い情報や噂を流してる厄介な伝書鳩的な存在が潜伏してるということだ。しかし、何故そんなことをするんだろうな。一応、俺も勇者なんだが。

俺に何か因縁がある奴でも……いやこの世界に来て一日目だぞ。そんなことはあり得ない。

考え耽っているとそういえば自己紹介してないことを思い出す。

「……ハズレな盾の勇者の比企谷八幡です。よろしくお願いします」

「お、おう。ヒキガヤか。まあ、お得意様になってくれれば良い話だ。よろしく！」

さつき言われた言葉を根に持っていたので、そのお返しとばかりに自虐という軽いジャブを混ぜた挨拶を済ませたところで、武器選びに移る。

「ねえ親父さん。何か良い装備無い？」

俺とおっさんとの会話がひと段落したのを見計らったのか、そこでマインさんが色目をしながらおっさんにそう尋ねた。

「そうだなあ……予算はどのくらいだ？」

「そうねえ……」

そう言いながら、マインさんが俺を値踏みするように見る。

なんかイラッと来たな今の目。合コンに絶対一人は居る、高給男絶

対逃がさない系女子みたいな野獣の目をしてたぞ。

「銀貨250枚の範囲かしら」

所持銀貨800枚の中で250枚……宿代とか仲間を雇い入れる代金を考えれば妥当なところだが、防具に至っては命を守るものなんだしもう少し高くても良いんじゃないか。

「お？ それくらいとなると、この辺りか」

おっさんはカウンターから乗り出し、店に飾られている武器を数本、持って来る。

「あんちゃん。得意な武器はあるかい？」

「……そもそも武器自体持ったことがありません」

「となると、初心者でも扱いやすい剣辺りがオススメだね」

次には、カウンターから数本の剣を取り出して、カウンターに並べた。

「どれもブラッドクリンコーティングが掛かってるからこの辺りがオススメだ」

「ブラッドクリン？」

「血糊で切れ味が落ちないコーティングが掛かってるのよ」

「へえ……」

切れ味が落ちないか。つくづく異世界だな。

中々の業物みたいだが、高そうだ。

「左から鉄、魔法鉄、魔法鋼鉄、銀鉄と高価になっていくが性能はお墨付きだよ」

これは剣を製作する際に使用している鉱石によってということだな。鉄のカテゴリ武器って感じか。

「まだまだ上の武器があるけど総予算銀貨250枚だとこの辺りだ」

にしても中々の品揃えだ。俺がよく知るRPGだったら、普通は旅の始まりなんかは木の剣とかが最初の武器で、村の武器屋には精々鉄の剣が売られてくるくらい。

考えてみれば、これだけ品揃えが良いのは当然か。何せここは王様が住んでる城がある大都市だ。ここがメルロマルク王国の首都ってことは間違いはないし、どの国の首都も人が大勢いる訳だから物流が

良いのだ。故にこの武器屋の品揃えがここまで良いんだろう。

「鉄の剣、か」

こうして間近で見ると、ただの鉄の剣なのにも関わらずに迫力を感じてしまう。これが人を殺すために作られた武器、か。

でも俺が戦う相手は『波』から生まれる魔物らしいしな。切った時の感触とか血には早く慣れておかないと、精神がやられてしまいそう
だ。

頭の中でそんなことを思いながら、剣の柄を握る。

しかし直後――

「……ッ!？」

――バチイツ。という静電気が一気に放出されたような音が鳴り響き、同時に柄を握ろうとした俺の手に鋭い痛みが駆け巡った。

いつてえええ!

心の中で声にならない悲鳴を上げていると、俺はすかさずおっさんの方を訝しむ。

もしかして嫌がらせか? と。しかしおっさんは首を横に振る。マインさんにも同じように「突然弾かれたようにみえたわよ?」と言われて、困惑する。

「……どういふことだ」

すると、俺の視界に文字が浮かび上がってきた。

『伝説武器の規則事項、専用武器以外の所持に触れました』

なんだコレは? と、急いでヘルプを呼び出して説明文を探してみる。

そこにはこう記されていた。

『勇者は自分の所持する伝説武器以外を戦闘に使うことは出来ない』

という文章だ。

はい、詰みです。盾でどうやって攻撃しろと言っただよ!

「……どうやら、俺はこの盾のせいで他の武器は持てないらしいです」
もしかしたら盾には実は意思があって嫌われているのかも一瞬
思ったことは内緒だ。

「どんな原理なんだ? 少し見せてくれないか?」

俺はおっさんにに盾が付いている方の右手を向けて見させる。
外れないのだから仕方が無い。

おっさんが小声で何かを呟くと、盾に向かって小さい光の玉が飛んでいって弾けた。おっさん魔法の類使えたのね。

「ふむ、一見するとスモールシールドだが、何かおかしいな……」

「そうですね」

一応、ステータスにもスモールシールドと記載されていた。(伝説武器) という項目が付いているが、まあ勇者だしな。

「真ん中に核となる宝石が付いているだろ？ ここに何か強力な力を感ずる。鑑定魔法で見てみたが……うまく見ることが出来なかった。呪いの類なら一発で分かるんだがな」

見終わったおっさんは目線を俺に向けてトレードマークの髭を撫でる。

「面白いものを見せてもらったぜ、じゃあ防具でも買うかい？」

「お願いします」

「銀貨250枚の範囲で武器防具を揃えさせるつもりだったが、それなら鎧だな」

盾は既に持っているわけだし、結果的にそうなるか。ここは素直にその意見に甘えさせてもらおう。おっさんは店に展示されている鎧を何個か指差しながら

「フルプレートは動きが鈍くなるから冒険向きじゃねえな。精々、鎖帷子が入門者向けだろう」

と言ってきた。俺は其中でも鎖帷子くさりかたびらに手を伸ばした。

鎖でつながれた服だが、動きやすさを重視するのであれば、これだろう。

じっくりと観察していると、また視界に変なアイコンが現れた。

『鎖帷子くさりかたびら 防御力アップ 斬撃耐性(小)』

ほーん。めっちゃ便利だなこの機能。もしかして俺の脳にICチップとか埋め込まれてんのか。

「あれの値段はどれくらいなんですか？」

メインさんがおっさんに尋ねる。

「おまけして銀貨120枚だな」

「買取だと?」

「ん? そうだなあ……新古品なら銀貨100枚で買う所だ」

「……買取?」

「盾の勇者様が成長して不必要になった場合の買取額を聞いていたのですよ」

「……………そうか。確かにな」

「……………なるほどね?」

「え? ど、どうしたんですか勇者様」

「いや、別に」

「?」

「……………ま、いいか。」

少し間があつた俺の反応に何やら彼女は気になるご様子だ。無視しますけどね。

「店主さん。これ下さい」

「まいど! ついでに中着をオマケしておくぜ!」

おっさんのの気前のよさに俺は正直、これまでの失礼をチャラにしたいほどだった。流石にワイシャツが鎖帷子の下着では格好が付かない。そうして、俺は銀貨120枚を渡し、鎖帷子を手に入れた。

「ここで着ていくかい?」

「はい」

「じゃあ、こっちだ」

更衣室に案内され、俺は渡されたインナーと鎖帷子に着替えた。元々着ていた制服は店主がくれた袋に入れる。さらば、総武高。

「お、少しは見えるカツコになったじゃねえか」

「ありがとうございます」

俺が言うのもなんだが褒めるの下手か。このおっさんはあれだな。将来的に好きな女が出来てデートをする時に失敗すると見た。

マインさんに至ってはスルーだ。完全に俺に興味を示さない様子。やっぱり義務で俺の旅に同行するみたいだ。

俺たちは店を出ると早速とばかりにマインさんは俺を先導する。

「それじゃあそろそろ戦いに行きましようか勇者様」

「……！」

地球産の不思議な服から、鎖帷子を身につけた勇者様である俺に、お世辞でも何かしらは言われると思っていたのに、まさかノーコメントだとは思わなかった。普通はあのおっさんと続く形で何かしら言うと思うんだけどな。

……それに、さっきの言動にも気になるものがあつたしな。どうも本格的にきな臭くなってきた。

だから先ずは情報だ。まだ俺はこの世界の知識についてまだ何も知らない。他の勇者たちはこの異世界によく似たゲームをやっていたから大体は把握しているようだが、俺のこの異世界についての知識量は、完全にこの世界の子供以下だ。

情報こそが生命線。戦う前にもしつかりと準備しなければ。

「……いや、先ずは情報収集がしたいんだが」

だから、戦いに促そうとするマインさんを引き留める。

「はい？　せつかく装備を新調したんですから行きましようよ。出遅れちゃいますよ！」

出遅れる。最もな意見だが、それ以上に情報を仕入れることが今は重要なのだ。

「マインさん」

「？」

少し自信はないが、説得を試みるか。

「……俺はマインさんが知ってるの通り、この世界についての知識に疎すぎる」

「あ、ああ。そういうことですか。別に平気ですよ！　今日くらいは別に試しに戦いに行ってもいいと思うけどなあ……ほら、勘を掴んでおかないといけませんし」

「確かにそうなんだが、あんたが思ってる以上に俺のこの知識量は致命的なんだ。……誰も俺に付いてこようとしなかった手前もあるしな」

「あつ……」

「それに、今の俺にとっては何もかもが新しいことで、正直今だって混乱してるくらいなんだよ」

「は、はあ」

「だから今日は情報収集でいいか。別に旅は長いし、今日だけじゃないだろ？ 明日からでも戦いは間に合うと思うんだが」

「……」

そう意見具申すると、マインさんは先程までの浮かべていた笑顔ではなく、いつになく真剣な顔で黙考して次にはこう質問してきた。

「……因みに何処で情報収集して、どのような情報を調べたいんですか？」

「出来ればこの国で一番大きな規模で本を扱ってる場所が望ましい。そして、調べたいものはこの世界についてのこととか……この国の色々なことについてだ。あと、出来ればマインさんには、文字が読めないので全部じゃなくても良い。書物の要点だけを通訳をしてほしい」

自分がこの国の文字を読めないのが分かったのは、さっきの武器店の看板が読めなかったからだ。でも何故話せているのかについては、どうやら手に付いている盾——伝説の武器が関係しているらしい。翻訳機能といえいいのかわからんが。

と、そんなことは置いておいて。さて、マインさんの反応は。

「……っ」

何か少し……怖い目をしてるな。まるで俺がこの国についての情報収集することが気に入らないみたいだ。

実は先程、マインさんは俺が『この世界について調べたい』と言った時は変化は見せなかったのだが、『この国の色々なことについて調べたい』と言った時僅かに眉をピクリと明らかに反応させていたのだ。

「ん？ マインさん。大丈夫か？」

「え、ええ……」

嘘つけ。これまでの不自然な反応から、何か俺に隠し事をしていることは分かってんだよ。

「それで……さっき言ったこと、お願い出来るか？」

「いいや。その、言いにくいんですが。国立図書館や城の書庫は限られた人しか入れないんですよ。入れるとしても、貴族じゃないと……」

そう来たか。追求したいところだが、ここで追求すると逆に怪しまれる。出来れば現時点でこの国に疑いを持つてることを知られたくないしな。

「……そうなんすね」

「はい。そ、そうなんです！　なので勇者様。今日のところは一先ず戦いにいきませんか？」

「そういうことなら……行くか」

「はい！　門まではここから数分もすれば着きますよ！」

そうして先に歩き出したマインさんの後ろを、俺もついて行く。確かに彼女は美人で明るくて、気立ても良さそうだ。

——だけど決して、隣には歩きたくない。俺の本能が警鐘を鳴らしていた。

「……くそ」

思わず、小さく悪態を吐いた。

ここに来てから、どうも何もかもが怪しく見えて、心が常に殺気立っている。一泊して眠ったが、異世界ということもあり、周りは赤の他人だらけ。その実、あまり疲れが取れてない。俺の心は既に結構擦り減っていた。

「……今頃あいつらは、どうしてるのかねえ」

だから尚更今は、ここに来る前までは憎みに憎んでいたあのクソツタレな社会が構築する世界が。

あの教室の情景が。

全てが——

……いや、柄じゃないか。

そう自嘲して、俺は空を仰ぎ見た。綺麗な空だ。排気ガスも何も無い、本当に澄み切った空。

「……行くか」

旅に出る前に、妹に心の手紙を書いておくか。

拜啓 比企谷小町様

取り敢えず小町。

お兄ちゃんはストレスで禿げそうです。

敬具 比企谷八幡より

……これただのスパムメールだな。

初戦闘と共闘

城門に着くと、とても大きな門があった。まさにハリウッドの中世をモデルにした映画に出てくる城壁都市の門そのもので、とても重厚な印象を受けた。

そして城門を通る際に礼をしてくれる門番さんが両側に二人。片方はなんか厳格そうなおっさんだった。流石は門番。やはり強面の人が選ばられるのか。

城門から出ると、そこには日本に住んでいては先ず見ることもない豊かで、壮大な草原が広がっていた。

「……おおー！」

やはり、異世界に来たんだなと実感して止まない。ここから先、どんな冒険をしていくのだろうか。そんな期待を膨らませていた。

「……」

「あの、勇者様？」

——そう、先程までは。

「……え、何あのパツ○マンみたいな生き物」

普通に怖い。何、アレ。地球外生命体もいいところだろ。

「あれはオレンジバルーンです。とても弱いのですが、好戦的な魔物ですね。勇者様、手始めにあれと戦ってみて下さい」

「……アレと戦うのか？」

「はい」

冗談じゃない。

確かに城門に出る前までは柄でも無いのに、人並みくらいには期待感に胸を膨らませたものだ。

しかし、一步踏み出したらどうだろうか。風船に近い挙動をしており、一見可愛くも見えてくる丸み帯びている身体に、ちゃんと顔が化け物してる魔物たちがなんとそこら中に居るでは無いか。

普通に怖いです。何あの口めつちやギザギザしてる……明らかに噛まれたら痛そうじゃねえか！

臆病者、チキンだと。そう罵ってくれても構わない。

だが今まで、地球上でも治安が良すぎた日本という国に十七年間過ごしてきて、いきなりこんな化け物がいる世界に送り込まれたら、いくらあのような雑魚敵でも、初見だったら誰しも恐怖を抱くに決まってる。

「……腕も足もねえのになんでぴよんぴよん跳ねてんだあいつ」

スライムであればまだ抵抗感は無かったのかもしれない。しかしオレンジバルーンと呼ばれるあの魔物にはどうにもまだ慣れない。

そうだ！ 俺以外にも地球出身の人間居るよな！ あいつらも多分俺みたいに尻込みをしてるに決まってるなあ！

そうと決まれば、他の勇者たちの様子を見に行こう。流石に戦わなければまずいだろうが、まずは他の勇者たちの戦い方を見て学ぶべくことも大事だろう。うんうん……うん？

あれは天木か。あいつオレンジバルーンを相手取ってるな。あれ、怖く無いのか？

「ッ！」

そうやって、天木が一撃でオレンジバルーンを討伐して見せる。一方俺は困惑している。

……あれ？ 天木？

「はあッ！」

パーン！

女タラシ先輩も平然と槍で華麗に倒してやがる。

……その戦闘をパーティである筈なのに傍観していた女たちがキヤーキヤー声援を上げてるが。うっさ！ お前らはギャラリーかよ戦えよ！

「物足りませんね」

パーン！

川なんともか倒してるけどこいつはどうでもいいや。あと戦って

る時に喋んな舌噛むぞ。

とは言えだ。天木に続くように北村、川なんともかも平然と討伐しているようだ。その姿に若干俺は引いている。こういう時は初戦闘なんだから多少の尻込みをするのが鉄板だろ。お前らがしてることって戦争映画で新兵がベテラン兵士よりも初戦闘でビビらずに突撃して敵を倒しまくることがくらいにおかしいことだからな。

「ふ、普通に倒してるな……」

「そうですね。オレンジバルーンはいわば雑魚敵ですし。盾の勇者様も……あ、そういうえば武器を待てないのでしたっけ。それならば多少の時間はかかってしまうかもっ」

「……」

なんかマインさん時々イラつくような言葉言つて来るよな。しかも声も明らかに猫かぶってるから尚更だ。まあいいですけど。

しかし、良く好戦的なオレンジバルーンという魔物相手に、しかも武器の使い方も身についてない元一般人なはずなのに、初見でガンガンいけるなあいつら。何、何処かの戦闘狂なの？ この世界に強敵が居ると思うとワクワクしてくっぞ病になってるの？

「……まあ、そうだよな」

仮にも、いくらハズレとはいえ、勇者としてここに呼ばれたんだ。戦わなければこの世界での俺の存在価値なんて底辺も底辺。特に異世界という常に戦闘が付き纏うこの世界において、俺たちのようなこの世界に家も身元もない異世界人で、拳句に功績を持たない奴なんていうのは、奴隷以下の価値になりかねない。

……奴隷が居るかは知らんけど。

そろそろ戦うか。

「じゃあマインさん。俺がオレンジバルーンの攻撃を引き受けるから、その隙に横から攻撃してくれ」

生憎と、先程の武器屋で俺が他の武器を持ってないという絶望的な事実は知った。だがそこでよくよくよしては居られない。そういうときは仲間に頼れば良い。

しかし、マインさんはその言葉に首を横に振る。

「いえ、まずは私が戦う前に勇者様の実力を測りませんと——」

「——いやそういうの良から効率的にいいこう。まずは俺があいつの注意を引き、マインさんは回り込むように移動して逃げられない状況に陥れる。そしてあいつが俺に噛み付いてきたらその隙にマインさんが攻撃す——」

「——え？ あ、あの！ 勇者様！ 聞いてますか!？」

「……なに？」

と、マインさんが何故か慌てて俺の話を中断してきた。

今シャイな俺が頑張って作戦説明という怠い役目を頑張ってるんだが？

「で、ですから！ まずは勇者様の実力を……」

「一つ質問なんだがマインさん。俺にそもそも実力なんてあると思うか？」

「……そ、それは。その、あると思います！ だから私は先に勇者様の実力を見ておきたいのです！」

はいダウト。目を逸らしたのにマイナス50点。そして矢継ぎ早に喋ったことにマイナス50点。そしてトドメに、さっきから言動が怪しすぎるにマイナス100点。合わせるとマインさんへの俺のからの信頼度がマイナス200点だ。やったね。

一々、言動が嘘っぽいんだよなこの人。

だがこういう相手に対する策はある。こういう嘘八百な人にはただひたすらと逃げ場を無くすように根拠を述べていけば良いだけだ。

「……じゃあ言って無かったな。残念ながら俺に戦闘経験なんて皆無だ。これまで十七年間生きてきて、ロクな戦闘をしたことないし、拳句には魔物だって全部が初見。加えて俺はこの伝説の武器の特性上、他の武器を持つことが出来ない。だから俺には、これまで冒険者をやってきたマインさんの経験と武器の力が必要なんだ……他に何かあるか？」

「っ……」

残念ながら、俺にはプライドというものを持ち合わせていない。普通の男ならば、マインさんのような美人に先程のように『実力を見せ

てほしい』と言われたら、意地でもあのオレンジバルーンを倒そうとしただろうが、俺には何せ武器がない。根性で頑張ればその内倒せるとは思うが、無駄な時間と体力を費やすだけだ。しかも、もしここでメインさんが戦っている姿を見れば、本当にこれまで冒険者稼業をやっていたか分かるし、俺が武器も無しに必死に戦ってる無様な姿をメインさんに見られたくないという理由もあつた。何故かというところ……彼女から何処となく、たまにだが嘲られている気がしてならないためだ。個人的な主観だが。そんな相手に見つともない姿を見せるほど、俺は大胆では無い。

そんな風に考えている俺がツラツラと『何故二人で戦わなければならぬのか』に至るまでの根拠を述べていくと、メインさんは何故か少し悔しそうな顔をした後、また隠すように笑顔に変えてぎこちなく頷いた。

「……わ、分かりました」

「助かる。じゃあさっきの話の続きだが——」

そうして、俺とメインさんはオレンジバルーンを協力して倒し続けたのだった。



「——メインさんー！」

俺は構えた盾にオレンジバルーンが噛み付いているのを確認すると、メインさんの方へ振り払った。

「分かってる……わよー！」

呼ぶ声にそう呼応して、彼女は目の前に振り払われたオレンジバルーンを剣で突き刺した。すると、パーンと風船が割れる音のような甲高い音が辺りの平原に鳴り響いたと同時に、ヤツの身体も破裂する。

戦闘は終了したようだ。

因みにメインさんの動きはいまいちだった。メインさんが繰り出

した技は剣で突き刺すだけで、まだ全部の実力を見れたわけじゃない。まあ、何処となく足運びに素人感が出ているのが否めない。……もしかしたら冒険者をやっていたことは嘘なのかもしれない。

「……これでオレンジバルーンの皮も三十二枚。イエローバルーンの皮も二十九枚。すべてマインさんのおかげだ」

「……それはどうも」

俺が礼を言うと、マインさんは不満のようで努めて笑顔で応えてくれた。まあ戦闘に関して俺が偉そうに仕切っていたからな。最初は彼女が案の定得意げな顔をしながら仕切ろうとしたが俺が無慈悲に言葉を被せていくと次第に無言で戦ってくれた。だが攻撃を受ける側の俺が隙を見せたタイミングを伝えなければ、オレンジバルーンや亜種のイエローバルーンも素早いために中々攻撃を当てられない。だから俺が仕切っただけだ。

しかし、この討伐数に至ったのはマインさんのおかげ、これは事実だ。正直、剣を持ったマインさんがいなければ俺はずっとオレンジバルーンが割れるまで殴り続けていた。側から見ても不毛な倒し方だし、やってる本人も疲れるし拳が痛くなりそうだ。だが初戦闘にしては、中々の討伐数だと思う。

「……」

そろそろ日も傾いてきた頃だな。夕日が草原の地平線まで落ちていく綺麗な光景を目にしながらふと思う。

ここまで、意外にも戦闘に夢中になっていたせいもあり、時間もあつという間に感じられた。初戦闘した影響で、こうして戦闘が終わったあとも、ずっと興奮してる感じた。アドレナリンが分泌されているからだろう。

——戦闘自体も最初は連携の面で支障をきたしたが、俺のとある一言でマインさんは見違えるように俺に合わせてくれるようになった。『……もう少しきつちり戦ってくれば、報酬は嵩むし、なんなら報酬も7割は持って行ってくれてもいいんだけどな』

と、独り言を吐いただけでまさかここまで彼女の動きが良くなるとは。流石はマインさん。素晴らしい仲間意識をお持ちで。

……お金の力はやっぱり凄いな。

「ではそろそろ帰りましょう！ 私も流石に疲れてしまいましたっ」

「……そうだな。帰ろう」

マインさんは満面な笑みそう言ってるが、本当に相当疲れた様子だ。あと何となく笑顔が怖い。一見、ただ帰ろうと催促してる言葉だが、『はあー！ こんな男と連携して戦うだなんて苦行だったけど、終わって嬉しい！』的な意味を孕んでいそう。これは嫌われたか。

なるほど。不機嫌そうな彼女のこういうときは――

「……マインさん。約束通りに報酬は3：7だ。それで良いか？」

――と、俺が言ったその後のマインさんの反応って言ったらそれはもう手のひらがくるつくるで愉快なものだった。

「ええ！ 良いんですかあ？ ありがとうございます勇者様♪」

「……ああ」

「あ、勇者様！ 良かったら良い宿を紹介しますよ！ あと特別にワインも奢っちゃいますう♪」

「……お、おう」

なんだろう。出会って今日でこの人の扱い方が分かってきた気がする。お金の貪欲で単純過ぎないですかね。

そうして、草原の狩場から城門へ歩いて辿り着く頃に、彼女はこんなことを口走ってきた。

「あとまた武器屋に寄って、私の装備を整えましょうよ！ そっちの方が効率的でしょう？」

なるほど、その顔といい相変わらずの作った声といいイラついてくるが、言ってることは正論だ。攻撃をする人の装備を整えればもっと効率的な狩りが出来ること間違いなしだろう。

だが、どうやら彼女は、俺がさつきから多用しがちな効率的という言葉に対して余程根に持っていたらしい。

「……確かにそうだな。冒険者様」

と、皮肉げに返すと、彼女は面白くなさそうに前を振り向き、歩く速度を上げて距離を取ってきたので、俺はそのままの歩く速度で城門

を抜ける。

門番さんには俺たちが仲間である筈なのに明らかに距離を取って歩いてくる姿を見て、奇異な視線を向けられたが無視して、俺たちはあのおっさんでお馴染みの武器屋に向かうことにしたのだった。

「……おい、兄ちゃん。彼女さんと何かあったのかい？」

「痴話喧嘩っす」

「なるほどなあ」

ちなみにあの厳格なおっさん門番さんとちよつとだけこんな感じの適当な会話をしたのは内緒だ。流石に後々、適当に返答し過ぎたと後悔した。